

アサギマダラの新しい食草(ガガイモ)を発見

県南部にも生息は可能

近 藤 光 宏

アサギマダラ *Parantica sita nipponica* Moore の食草としては、従来、カモメズル、オオカモメズル、コカモメズル、キジョラン、フヨウランの5種が記録されている。ところが筆者は同じガガイモ科のガガイモ *Metaplexis japonica* Makino で飼育することに成功した。

この大業を蝶の権威でいられる、九州大学教養部生物学教室助教授、白水隆先生に連絡していたところ、このほど「本種の食草として、ガガイモを上げた文献も、又ガガイモで飼育した文献もない」との思わぬ便りを受けたので、ここに新知見として一応報告致します。

去る、1962年10月1日、秋晴れのよい天気倉敷市巡島町宮之浦の④の地点で、遊んでいた児童の1人が「あまり見たことのないちょうが飛んでいる」と言って連絡に来る。アサギマダラ?ではないかと思ひ、さっそく行って見る。そこは、運動場の土を支えている高さ4 m位の石垣の北面で南北に民家、東にミカン、西にエノキ、ビワがあって、日あたりはよくない。その石垣へ、イノコズチ、ヒメムカンヨモギ等の雑草のはえている中から、数本のつる草(後ガガイモとわかる)がアサガオのつるのようにからみあって登っており高いところでは、金網のへい造達している。蝶は、まぎれもなくアサギマダラである。つる草の葉の密集している部分を主に、上下して飛遊している。付近はもとより、県南部では、珍しい蝶のこと、すぐにも逃げてしまうような不安にかられる。なにしろ本種については、実に楽しい経験があり、それだけに筆者には貴重なものに思われる。(S 27年の夏、昆虫採集をはじめて3年目、クラブからはじめて大山に行き、胸をときめかせて採集

したのがこの蝶である。その時は10数頭採集している)。急いで、子ども達に丸のんで、網をはこんでもらうことにした。そこから50 m離れた所の職員室にしまってあった網をさがし出して持つて来る時間、常に飛遊を続ける蝶を心配しながら見守っていた筆者には相当時間を経過したように思われた。

つる草には、花もなく、吸着しているとは思われなない。一時して、胸の高まりもおさまり、保育社の原色日本蝶類図鑑の記を思い出すことができた。それに県北では、キジョランに発生することを聞いて知っていたが、もしや、このつる草は、キジョランではないか、そうすれば、本種の潜性とされている「産卵中の♀は、長くその場を離れない」の事実と一致している。それに、当地へ赴任してから、5年の間に、1961年10月14日同じ谷のやや上で目撃その時は、網をもたず採集できなかった。また、1962年5月、ここから一つ西側の谷で採集。これは、糖蜜を綿にしゅませて与えながら、約1か月飼育箱の中に生かすことができたが、食草のことは、わからず、産卵させることは、できなかった。また、岡山大学農学部助教授安江安宣先生も、1962年5月下旬に、倉敷の最も中心部である倉敷駅—交叉点間の道路上で、本種を目撃しておられる。と今度で4度目の対面である。

やっと網を手にかかすことができた。相変わらず、離れようとしなないが、産卵態勢?もかなり続いたので、逃飛をおそれ、思いあまってネットした。その後で、葉の表面を一応調べてみたが、残念ながら、産卵されている様子はなかった。今少しまわって見れば、よかったのかもしれない。事実、そ

の翌日産卵している。

採集した成虫に次のような期待をかけて、飼育箱にはなしてやる。

- ①♀体で、産卵すること。
- ②更に、卵は有精卵であり、孵化すること
- ③つる草が、キジョランであり、本種の食草であること。

径15cmの植木鉢に、現場にあったつる草を根ごと、崩りおこして、植え、そのまま飼育箱に入れてやる。糖蜜を与えたが、5月の時のように吸蜜は、しなかった。以下、飼育経過をまとめてみました。

◎ 飼育経過
(1962年)

10月1日 アサギマダラ成虫1♀を、倉敷市連島町宮之浦で記録、成虫は、ガガイモのつる付近を交飛し、産卵態勢にあった。(文献によれば産卵する際は、食草付近をかなり長時間離れない習性がある)

飼育箱へ、ガガイモを鉢植にして出す。

10月1日～4日 産卵する。23卵 …… [写真1]

- 葉表 …………… 8
 - 葉裏 …………… 6
 - 茎 …………… 3
 - 金網 …………… 4
 - 竹(つる草を支えていた) …… 1
 - その他落下したもの …… 1
- 計 23卵

以上のように、散在して産付されたものが多いが、一か所に4卵位かたまっているものもあった。文献によれば「野外で自然の状態では葉の裏に1卵あて産付する習性がある。」

10月4日 卵上部黒化する。

10月7日 孵化を始める。1令尾部より糸を出して体を支えている。新しい食草のところへ移そうとしたが、糸を引いて思うように離れようとしない。2exx元気がなく死ぬ。

10月12日 かなり大きくなる。胴部各部の色彩斑紋ははっきり表われる。食草ガガイモの食こん付近に乳状液を分泌している。

10月14日 個体によって、成長度の差が大きい。食草の新鮮なものを次々と与える。

10月19日 1眠に入る。脱皮して1令～2令となる。

10月21日 倉敷市向山町向山100m位の丘でガガイモを発見する。

10月22日 かなり成長する。

10月29日 2令～3令一段と成長する。(写真2)

11月2日 倉敷昆虫館開館にそなえて展示するため約7kmの道を自動車で運ぶが異常はない。昆虫館に隣接している 倉敷中央病院にも食草

のあることがわかる(古藤野寛氏) 以後3～4回中央病院のへいに繁殖している。食草を採集して来て、葉害を心配して、きれいに水洗し与える。食草取りかえ中3exx正死させる。

11月5日 蛹となる 2exx …… [写真3]

11月4日 蛹となる 1exx

11月7日 蛹化する 1exx

11月8日 蛹化する 5exx

11月9日 相継いで蛹化する 9exx 残 1exx [写真4] (1963)

1月1日 羽化する 6exx …… [写真5]

教室南側の戸棚の上であって日中の室温が、かなり上昇したために早く羽化を見たのかももしれない。

スナッフするために、紙上にとり出していた 1ex はそのまま室外へ逃げてしまった。

1月1日 1ex 羽化不完全のまま以後2～3日生存して死す。

1月9日 1ex 羽化する …… 手帳に羽化のちょうを記す。

1月10日 3exx 羽化する。

手帳の記、アサギマダラ P.M 1時10分羽化を始める。胸背面が破れて、胸部は10分位で脱皮する。継いで腹部がでる。羽が伸びはじめ、1時20分胴と羽同じ長さ、1時30分羽はほぼ伸びたが小じわが残る。

室温 18°C、ストーブ、乾燥している。

以上のように、飼育経過を報告したわけですが嫌の飼育に、あまり経験をもたないので、当然すべき、処置をおこたって失敗したり、粗雑な取あつかいをして、死んだ個体もある。また、各令のこまかいデータもとっておらず、この点十分ではない。ただ発育はかなりよく、正常であることから、ガガイモが適していたといえよう。

即ち、原色日本蝶類幼虫大図鑑 Vol 1 保育社に飼育経過の1例(神村1901)が記してある。()内が筆者の飼育した場合。

10月7日 産卵 8日 (7日～10日)

10月4日 孵化

11月3日 1眠起

11月9日 2眠起

11月16日 3眠起 64日 (遅れた個体でも 60日)

11月26日 4眠起

12月2日 蛹化

96日 (6exxは12日 3exxは22日)

翌年3月28日 羽化

筆者の場合、室内で飼育したことにより、早く羽化したものと思う。

なお、羽化後の成虫は、糖蜜、蜂蜜を与え1～15か月位飼育して、死んだものから、標本にして所蔵してある。

倉敷附近の略図

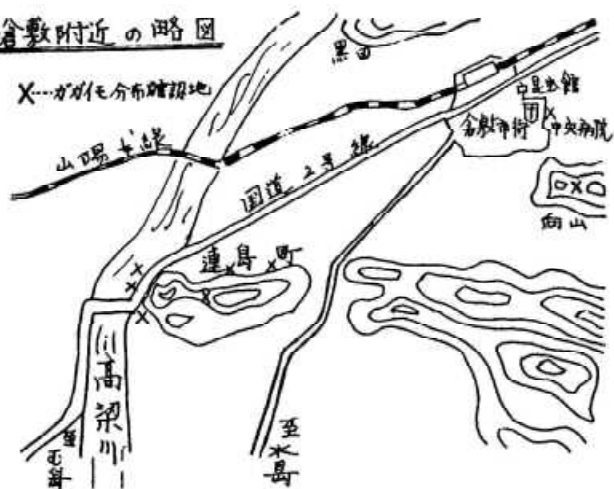


写真1

写真2

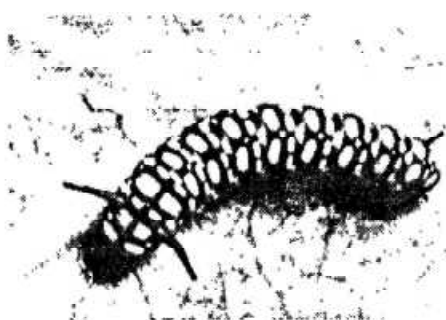


写真3

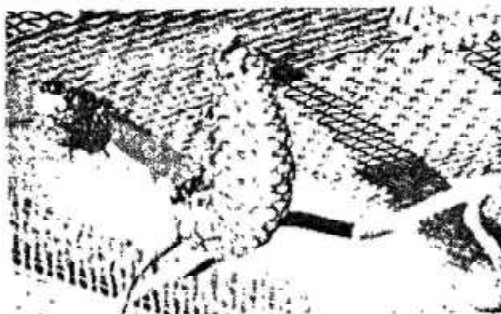


写真4



写真5



写真6



◎食草ガガイモについて …………… [写真6]

写真6は、倉敷市連島町弁才天にある、民家の竹垣に繁茂しているガガイモである。

筆者は、はじめの頃、図鑑を見て、キジョランではないかと思ひ、さっそくある人に同定してもらったところ、送った標本が乾燥していたせいも、やはりキジョランとの連絡を受け、そう思ひこんでいた。ところが、昆虫館の準備をしていて本会の渡部太郎氏がこのあたりに、キジョランがあるとは興味深いと、不信に思われる。その後、幼虫が中令期に入った頃、県下の植物相に特に詳しい、古屋野寛氏の同定によって、これがガガイモであり、キジョランは、県南部にはないことがわかった。倉敷付近のガガイモの分布状況は地図上⑧印のように、かなり拡範囲に及んでおり、筆者の確認し得たところは、倉敷市連島町一帯の路傍、垣根、高梁川のヨシに登っているもの、やぶの中、倉敷市向山町向山、(海拔100m)倉敷市旭町中央病院内等である。またガガイモの種子には、特長があり、白色の種髪を有し、風に從って、よく飛ぶので通称「ラッカサン」と呼んで、貴重な季節の遊具として親しんだことを思い出す。その頃には、倉敷市住吉町、太原農研にも、かなり分布していたようである。

ガガイモは、牧野日本植物図鑑北隆館によれば同旋花目 *Contortae*

リンドウ亜目 *Gentianeae*

ガガイモ科 *Asclepiadaceae*

ガガイモ *Metaplexis japonica* Makim 一名
ごがみ、くさばんや

ガガイモ科として18種記載されている中の1種で「原野に自生する多年生で、つるまき状に伸びる草本である。地下茎を引いて繁殖し葉は長く伸びて緑色をしている。長さは2m内外、葉には柄があり対生している。その形は、長心臓形を成しており、支脈は、はっきりしている。茎・葉を切ると白い汁を出す。夏期に入って、葉腋に長花梗を出し、梗末に短かい花穂を成して、淡紫色の短梗花を開く……中略……種子の種髪は、線の代用として針挿・印肉等に用いられる。」

◎県南部にも発生は可能

アサギマダラについて、これまでの通説は本会赤枝一弘氏も述べているように(岡山県南部の蝶 1960年1月)「南部では8月以前に確実な採集・目撃の記録がないところから、秋期に北部から移動してくる(水野)というのが正しいようである。今後の調査が待たれる」とされていた。一方、本会の前田喜四雄・秋山博志両氏(総社市の蝶1)で「下記のような記録はあるがはっきりわからない。市北より

市内に移動するらしい? しかし5月に捕えられているので食草カモメズル・キジョラン等とされている。

しかし、ガガイモで、飼育は十分できるわけである。野外で成育しておれば、ガガイモの分布は先きに述べたように、市内には、かなり普通に分布しており、土着して発生していることも十分考えられる。なお、このことを裏付けるように、最近5月に採集・目撃の記録をみている。

以下に、筆者の調べた範囲で、アサギマダラの県南部の記録を載けてみた。

1949 10 5 総社市登溪 小野(目撃)?

1949 10 16 倉敷市鶴形山 友野 収

1950 10 14 倉敷市内 小野悦夫

1952 8 総社市田町 小西?

1952 9 24 都窪郡清音村黒田 広瀬義躬

1953 9 10 岡大内 松井

1953 10 21 都窪郡山手村福山の北面 水野弘造
lex 彩集 lex 目撃逃がす

1956 9 28 倉敷市側の福山 友野良一

1957 10 邑久郡大ケ島 大森

1957 10 金甲山 大森

1958 5 25 総社市総社宮 東

アジサイの花
上で lex

1960 5 8 高梁市玉川町下切 堀 (目撃)

1960 10 14 倉敷市連島町 近藤光宏(目撃)

1961 5 倉敷市連島町 大野憲一(目撃)

1962 5 倉敷市連島町 近藤光宏

1962 7 7 岡山市門田 高原哲夫

1962 10 1 倉敷市連島町 近藤光宏

年月日不明 倉敷市福田 船越 lex

追記

1962,5月下旬 快晴 倉敷市栄町 倉敷国鉄駅付
近 岡大農学部助教授

安江安宣(目撃)

◎考察

ガガイモを食草の一つとみなすことについて、白水隆先生は、卵が産卵態勢をとっていたという事ですから、そのまましておけば産卵したことは、ほぼ確かで、食草の一つと見てよいと思います。厳密に言えば、その植物に産卵又は幼虫が確認され、且つその植物のみで生育する場合を食草とするのですが、産卵態勢にあったという事実は大体前記の条件に近いと見てよいと思います。と述べられており、「蝶と蟻」の別刷「ミドリシジミ類における幼虫食性進化」p.157に食草として掲げたものを次の3種を区別して扱われている。

オ1は、先ほど述べたように、自然状態におい

て食草となっているもの(野外においてその植物上に卵或は幼虫が見出され、その植物によって完全に成育し、羽化する場合)

オ2は、自然状態では現在までその植物上に卵或は幼虫が見出されたことはないが、その植物のみで、全幼虫期を飼育することができ、成虫にまでなすもの

オ3は、自然状態では現在までその植物上に卵或は幼虫が見出されたことはないが、飼育の場合に与えれば摂食する(或は摂食することがある)ことが観察されたものである。しかしこの場合は、その植物単独で全幼虫期を飼育し、成虫を羽化させることが確かめられていないものである。そして従来の記録では、オ2オ3の場合について、そのいずれであるか明確に示していないものが多いので全幼虫期を、その植物単独で飼育出来ることを明記した場合のみオ2のものとして採用している。

これとみると筆者の飼育の場合は、明らかに、オ2に該当している。この上は、ガガイモに、野外で自然の状態において、或は、幼虫を確認したい。又この経験を生かして、再び綿密に飼育してみたいが、いずれにしても成虫そのものが、比較的少く、珍しい種なので、図鑑にも本土に土着するまだらちょう科は、1属1種で、分布は九州から北海道まで全土に分布するが、南方系のものが本種のように北部の寒冷地にまで棲息するものはきわめて珍しく、他にあまり例をみないと記してある。筆者も、先に述べたように、昆虫採集に興味を覚えて3年目、S27年夏、大山採集行の時などには、相当個体数を見て、難なく十数頭を採集できたほどでしたが、その後は、年と共に減少したようで、県北でも稀れにしかいないのが現状のようである。従って再度こうした飼育の機会若しくは、野外観察ができるかどうか心配である。

県南部、主として倉敷付近に土着発生しているか否かについて、白水先生は「成虫が5月に2頭得られている事など考え合せると少なくとも年によっては、倉敷の平地にも発生していると言えると思えます」と述べられており、一応可能であると

◎ 今年度の採集会その他行専計画 ◎

このほど幹事会を開き、1963年度の行事として、次のような計画を立てました。ふるってご参加下さいませようお知らせします。

今年度の新しい試みとしては、8月25日の標本同定会、これは珍種にかぎらず、これまでの採集品を持寄って、採集地、その他懇談会を開くのも、お互いに種々な意義があるものと期待しています。

また、11月3日の文化の日、倉敷昆虫館1周年を記念して同会場に昆虫生態写真展を計画しております。会員の皆様には今から楽しみに、出品(キャビネ版以上)の方もよろしく願ひ致します。

考えてよい。確実なことは、今後の野外での観察にまちたい。

キジョランは、県南には分布していないとしても、なお、同じガガイモ科のオオカモメズル、コカモメズル、カモメズル、フヨウラン等の分布は筆者にとっては今のところ未知数であり、更に調査してみたい。

文末になりましたが、本種の食草並びに、県南の分布について、快く御教示をお寄せ下さへました。九州大学教養部生物学教室助教授、白水隆先生に厚くお礼申し上げます。また、食草の同定を、お願いし、わざわざ食草を採集して来て終始御協力頂きました。本会の古屋野寛氏に深く感謝致します。

◎ 引用文献

- | | |
|-------|---|
| 白水隆 | 日本鱗翅学会会報“蝶と蛾”別刷
Vol. 12, No. 4 S37年8月ミドリシ
ジミ類における幼虫食性の進化 p157 |
| 白水隆 | 保育社, “原色日本蝶類幼虫大図
鑑” S35年12月15日発行 |
| 原章 | 保育社 “原色日本蝶類図鑑” |
| 横山光夫 | 北隆館 “日本植物図鑑” |
| 牧野富太郎 | “岡山県南部の蝶” 1960年1月 |
| 赤枝一弘 | |
| 前田喜四雄 | : 総社高校生物部 “総社市の蝶(I)” |
| 秋山博志 | |
| 白神 昭 | 倉敷昆虫同好会誌 すずむし
Vol. 1 No. 1 アサギマダラ |
| 小野悦夫 | 倉敷昆虫同好会誌 すずむし
Vol. 1 No. 2 花岸に飛来したアサギ
マダラ |
| 友野良一 | 倉敷昆虫同好会誌 すずむし
Vol. 6 No. 4 福山のアサギマダラ |
| 近藤光宏 | 倉敷昆虫同好会誌 すずむし
Vol. 10 No. 2.3.4 倉敷の連島山でア
サギマダラを目撃 |
| 堀 浩 | 倉敷昆虫同好会誌 すずむし
Vol. 10 No. 2.3.4. アサギマダラの
目撃について |

詳しいことは追って連絡致します。

- | | |
|-----------|---|
| (1) 5月3日 | 高梁市玉川町玉川方面採集会
新鮮な春型の蝶、伯備線広瀬駅下車
倉敷 8:25(予定) |
| (2) 6月23日 | 新見市草間 方面 採集会
吉備高原一帯 セフィルス的好シ
伯備線 井倉駅下車
倉敷 8:25(予定) |
| (3) 8月25日 | 標本同定会 |
| (4) 9月15日 | 採集会 採集地未定 |
| (5) 11月3日 | 昆虫生態写真展
倉敷昆虫館を会場として予定しています |

伯耆大山昆虫採集品目録

高 橋 友 治

昨年(昭和27年)の8月1日から3日まで、伯耆大山に採集旅行にいったときの記録です。

採集品は次のようなものです。

採 集 品 目 録

- | | | |
|---------------|---------|-----------------|
| 1.ウラギンシジミ | 2ex | 大山寺部藩の手前 |
| 2.ウスイロオナガシジミ | 10ex | これはたいへん多くいた |
| 3.アイノミミドリシジミ | 1♂ | 横手道のしげみ |
| 4.オオミドリシジミ | 2♀ | 横手道のしげみ |
| 5.ジヨウザンミドリシジミ | 2♂♂ 4♀♀ | 横手道の橋下 大神山神社 |
| 6.エゾミドリシジミ | 1♂ 1♀ | 大神山神社 |
| 7.ハヤシミドリシジミ | 1♀ | 大神山神社 |
| 8.フジミドリシジミ | 2♀♀ | 山の家 |
| 9.トラフシジミ | 2ex | 横手道 |
| 10.ウラギンシジミ | 1♀ | 横手道 |
| 11.クロアゲハ | 2♀ | 横手道 |
| 12.キアゲハ | 1♀ | 樹水カ所 |
| 13.キチヨウ | 1ex | 横手道 |
| 14.ヒンシロキチヨウ | 1ex | 横手道 |
| 15.スズメバチ | 4ex | 宿の前 |
| 16.アサギマダラ | 3♂♂ 6♀♀ | 横手道
たんなり採集した |
| 17.シバノメキチヨウ | 4ex | 山の空付近 |
| 18.ヒメヒカゲ | 1ex | 山の空付近 |
| 19.ヒカゲキチヨウ | 1ex | 非常に多い |
| 20.クロヒカゲ | 2ex | 非常に多い |
| 21.ヒメキマダラヒカゲ | 2ex | 山の空付近 |
| 22.キマダラヒカゲ | 2ex | 山の空付近 |
| 23.サカハチキチヨウ | 2ex | 元谷 |
| 24.ウラギンヒヨウモン | 3ex | 横手道 |
| 25.ミンゴウヒヨウモン | 2ex | 横手道 |
| 26.ミドリヒヨウモン | 2ex | 樹水カ所 |
| 27.ウラギンヒヨウモン | 2ex | 樹水カ所 |
| 28.クモガタヒヨウモン | 2ex | 樹水カ所 |
| 29.イミヨウカササギ | 1ex | 元谷 |

同様にいろいろ採集することができたが、いたる所キチヨウ類は活動しにくく、なつかず、しらみ、虫の下などにかたまっていた。アサギマダラは居たのにつて採集しやすかった。

次に採集品について

クマカサシジミ科

- | | |
|-------------|-----|
| 1.オオヨスジカミキリ | 1ex |
| 2.ニンフカミキリ | 1ex |
| 3.ミドリカミキリ | 1ex |
| 4.シラホシカミキリ | 1ex |
| 5.ハンノキカミキリ | 2ex |
| 6.クロカミキリ | 3ex |
| 7.ホソカミキリ | 1ex |

コガネムシ科

- | | |
|-------------|-----|
| 1.クロコガネ | |
| 2.カンンヨコガネ | 1ex |
| 3.キンスジコガネ | 1ex |
| 4.オオセンチコガネ | 1ex |
| 5.マメコガネ | 1ex |
| 6.オオキチヨウコガネ | 1ex |
| 7.その他 | 5種 |

クワガタムシ科

- | | |
|-----------|-------|
| 1.ミヤマクワガタ | 1♂ 1♀ |
| 2.チビクワガタ | 11♀♀ |

ゾウムシ科

- | | |
|----------|-----|
| 1.オオゾウムシ | 2ex |
| その他 | 17種 |

ハシロコシ科

- | | |
|-----------|-----|
| 1.ニワハシロコシ | 1ex |
|-----------|-----|

カメムシ科

- | | |
|-------------|-----|
| 1.モンキツノカメ | 1ex |
| 2.ヘラクヌギカメムシ | 1ex |
| 3.キチヨウカメムシ | 1ex |
| 4.ホソシギカメムシ | 1ex |
| 5.エゾアオカメムシ | 1ex |

次にコースとしては

- | | |
|----|---|
| 1日 | 山の家 → あたりの林 |
| 2日 | 朝 山の家 → 大神山神社 → 大山寺
昼 横手道 → 樹水カ所
夕 山の家あたりの林 |
| 3日 | 山の家 → 登内山 → 横手道 → 樹水カ所
元谷など |

原 稿 募 集

にて下車し、丹波市上古川部落より天津山(981m)三井山(955m)間の峠を経て、阿智郡神楽河三坂にある山道(幅1m前後)をオオヒカゲを求めて歩行中、南面の新見市側で28(午前10時頃)北側の神舞町側で18(正午頃)を採集した。ゆるやかに飛出して灌木林にもぐりこみ、逃げ廻つたものであるが何れも極めて完全な個体で羽化して見えないものようである。

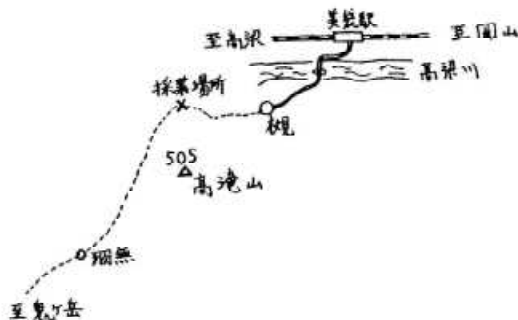
(参考文献を御教示いただいた青野孝昭氏に謝意を表します)

- 1) 岡山県: 岡山県内生物目録, 1930
- 2) 東史天調査会: 岡山県郷土館自誌, 1933
- 3) 小坂和彦: 岡山博物館同好会会報予報1, 1946
- 4) 河村公夫: すずむし, 1(12), 1951
- 5) 小井・笠尾: ヒツマツ, 2 Oct, 1954
- 6) 風早仁男: すずむし, 6(3), 1957
- 7) 遠信良: すずむし, 7(1), 1957
- 8) 倉吉高生生物クラブ: 生物クラブ報告, 1958
- 9) 片山豊八: 岡山と長中, 1959
- 10) 基語: すずむし, 9(4), 1960

(重井 博)

△△△ 高滝山にて *Leptepania japonica* を採集 △△△

去年のことになるが、1962年6月6日吉備郡神楽河町高滝山にて採集を試みた際 *Leptepania japonica* ヤマトナビコバネカミキリ〔半田信夫先生同定〕1♀を採集したので報告します。採集場所は平部部落から約1km入った谷合でフジの枯づるを *beat ing* している時採集しました。どこにも傷がなく、完全な点からみてちようどの頃が発生期と思われる。保育社の日本昆虫図鑑によると分布は本州(特に阪神地方)・四国となっており岡山県下での記録はほとんどないのではないかと思いますので一応報告しておきます。なお他の採集物ではタカサゴシロ、クワサビ(極めて多数)



ハイイロヤハズ、ゴマフ、ラミー、ヒメヒゲナカ、キクスイモドキ、ヤハズ、ホソキリング、ヨツキボシ(ウルシ科植物の立枯れの木に多数発生)ルリ、ヘリクロベニ、アトモンサビ、アトジロサビなどのカミキリを採集した。

(岡山市中井334 大森 齊)

高梁川河岸に越冬する ゴミムシ科

昨年の12月28日より高梁川の河岸(東側)で冬期採集を行った結果、次の様なゴミムシを採集することができました。

1. ノグチアオゴミムシ 28Ⅷ 1962
川辺橋より100m南の石下より採集
2. アオゴミムシ 20Ⅰ 1963
酒津の水門より約500m下流でコホソクビゴミムシと共に採集していた。
3. コホソクビゴミムシ 20Ⅰ 1963
水辺より1m離れた石下より、洞窟で越冬中の5頭を目撃、内2頭を採集。尚、本種は付近の石下を捜したが他の場所からは発見されなかつた。
4. マルガタゴミムシ 20Ⅰ 1963
酒津の水門付近の石下より採集。
5. 種名不明 20Ⅰ 1963
酒津の水門付近の石下より採集。
6. 種名不明 20Ⅰ 1963
体長5mm香味を帯びた黒色 ミズギワゴミムシ類と思われる。

(以上、コホソクビゴミムシを除き1頭)

尚、他に同付近で、3Ⅰ 1963にクロカメムシ及びヨソボシテントウムシダマシを2頭採集しました。

(山内司朗)

ホシアシブトハバチを採集



筆者は、去る1962年5月6日吉備郡明石町草田の高梁川南岸で本種 *Agencirbex janda* Moosary を2頭目撃、内1♀を記憶することができた。本科 *Cymbicidae* (=ペンウハバチ科) のものは稀れなものが多いが、本種についても、本州、四国、九州に産するが、甚だ稀れな種で、エノキを食すとき

れている。付近には、高梁川の河原流きに、モウソウ竹が一大群落をなしている。その中に同科も相当と思われるエノキがあり、そこに発生したものと思われる。写真は体長17mmの本種1♀ (近藤光宏)

“大佐町の蝶目録”

の採集記録訂正

本誌12巻3号に赤枝一以氏による大佐町の蝶目録が掲載され、当地の蝶相がほぼ、完全に近い形でまとめられている点、蝶類で研究に熱心な氏にして、はじめてなされたことと敬意を表する次第である。その際、筆者の既発表の採集記録も、よく引用され、ありがたく感じています。二、三採集記録引用に間違いが見られ、伊乱をまねくおそれがありますので、広瀬氏の方も含めて、筆者の気付いた点をここに端々させていただきます訂正しておきたいと思う。

すずむし 12巻 3号

誤 正

- P3(22)から2行 鷲山 1958・6・24 鷲山 1958・8・7
 P5(24) 8行 摺臼峠 1958・8・24 摺臼峠 1958・6・24
 P5(24) 11行 大佐山 1958・8・7 大佐町 小坂部 1958・7・23
 P5(24) 21行 市倉峠 1958・6・24 市倉峠 1958・8・8
 P5(24) 22行 大佐山 1958・8・7 大佐町 小坂部 1958・7・23
 P5(24) 33行 市倉峠 1958・8・7 市倉峠 1958・8・8
 P6(25) 2行 市倉峠 1958・8・7 市倉峠 1958・8・8
 (青野孝昭)

“すずむし” 12巻正誤表

“すずむし” 12巻に次のような誤りを認めましたので訂正願います。幹事多忙とはいえ校正の不手際心からお詫びいたします。

Vol. 12 No. 1

- F1. 8行 *fratercula* → *fratercula*
 P1. 22行 *Mukaii* → *Mukaii* Cameron
 P2. 下から8行 1853 → 1857
 下から6行 セミズジヒメハナカミキリ → セミズジヒメハナカミキリ
 P3. 22行 (*s. stor*) → (*s. str.*)
 31行 *Chorophorus* → *Chlorophorus*
 P4. 10行 *Uraacha* → *Uraecha*
 P5. 11行 *Oberea* → *Oberea*
 13行 * * *
 15行 *Oberea vittata* → *Oberea vittata*
 18行 & → d
 21行 ヨツボシカミキリ → ヨツボシカミキリ

P9 7行のよりに → のように

P10 22行 ツロチヨウ科 → ツロチヨウ科

Vol. 12. No. 2

- P1(12) 5行 *ibidi formis* → *ibidi formis*
 P1(12) 11行 市方形 → 市方系
 P1(12) 18行 (*Pseudopidonid*) → (*Pseudopidonia*)
 P3(4) 下から7行 同 → 同
 P3(4) 下から1行 キトラカミキリ → キイロトラカミキリ
 P5(6) 2行 *Arhopala* → *Arhopala*
 16(7) 12行 大塚山 → 大塚山
 18(9) 3行 *Sympetrum uniforme* Selys → *Sympetrum uniforme* Selys を採集
 P8(9) 4行 *Otomphus postocularis* Selys → *Otomphus postocularis* Selys を採集
 Vol. 12. No. 3
 P 3(22) 9行 *Tamilia Hesperidai* → *Familia Hesperidae*
 P 4(23) 6行 *Famichia* → *Familia*
 P 5(24) 15行 *Favonius* → *Favonius*
 P 5(24) 17行 * * *
 P 5(24) 18行 * * *
 P 5(24) 26行 *Goinzumi* → *Goinzumi*
 P 6(25) 3行 *Tamilia Nymphalidai* → *Familia Nymphalidae*

P 6(25) 下から14行 *c-aureum* → *c-album*

P 7(26) 5行 *Familia Satyridai* → *Familia Satyridae*

P 8(27) 4行 繁殖 → 繁殖

P10(29) 4行 色採 → 色彩

P12(31) 下から13行 事務用移転 → 事務所移転

Vol. 12. No. 4

- P 4(35) 17行 *rac* → 17 P9(40) 12行 両山 → 山頂
 P12(43) 1行 有志 名 → 有志 4名
 P12(43) 5行 本氏常に → 本氏をまじえて
 P12(43) 下から3行 ヒノキ木林 → ヒノキ林
 P13(44) 12行 湖岸 → 湖岸
 P15(46) 下から2行 渡辺太郎 → 渡部太郎
 P16(47) 6行 *Cypetrum* → *Sympetrum*

*学名は原稿が不明瞭であると、誤しよくが多くなりがちです。できる限り明確に書いて下さい。

(編集部)

早起は三文の得という話

— マツノシラホシゾウムシでの実験の思い出 —

宇野 弘之

マツノシラホシゾウムシ (*Cryptorhynchus insidiosus* Roelofs) は松喰虫の一種で、枯れた松の幹から普通に見出される。この虫の産卵場所はまだ確認されていないが、幼虫は松の幹の下部の樹皮層に形成層の部分にトンネルを掘って喰い入っている。数回の脱皮後、特徴的の馬蹄形のトンネルを穿ち、その中央に居室をつくり、さらに羽化してから外に抜け出るための小孔を樹皮にあけて蛹化する。したがって、松が枯れて間もない頃は皮をはいでみると、三かんに形成層部を喰い荒している幼虫が認められるだけである。樹皮に小孔があておれば、蛹、羽化したばかりの成虫あるいは今のすすんだ幼虫が採集できるわけである。

さて、私は大学の卒業論文にマツノシラホシゾウムシを材料に突撃することになった。当時大学の研究室では松喰虫を殺す糸状菌が3種見つけてあり、この糸状菌を使って松喰虫の防除にのりだしていたのである。私の研究のテーマは、この糸状菌が松喰虫の幼虫を殺す過程を顕微鏡で組織学的に調べることであった。すなわち、糸状菌は幼虫のどの部分から体内に侵入するのか、糸状菌の侵入につれて幼虫にはどのような組織病理学的変化がおこるのかなどを調べたわけである。この方向の研究では、糸状菌その他種々の外敵による昆虫の外部病理学的変化がかなり詳しく研究されていたが、組織病理学的変化についてはほとんどわからず、そのギャップを埋めることが久しく渴望されていたのであった。

そのような思惑で、松が枯れかけると原会いを見ては幼虫を採集に出かけ実験を続けていた。とはいっても、いつまでも近くで十分な枯れた松があるわけのものでもなく、やがては奥山まで40分ほどかかかって採集にいつたものである。真も近づけば僅かの時間の採集でもすぐ汗ばんでくる。そうした或る日、大学の構内で松の枯れかけているのを発見した。葉がすこしずつ赤味を増して居り、試みに一部樹皮を剝いでみると確かにマツノシラホシゾウムシの幼虫がいた。これ幸と喜び勇み、しばらく様子を見てから、いよいよ採集、実験にとりかかった。

実験当日、日の出前に研究室に到着した。家を

出たのは4時過ぎである。勿論、ねぼけ眼の自転車預りのおやじをたたき起こして自転車を預け、ついつられて降りたくなるような眠気を満載した夜汽車(?)に乗って出校したわけである。すがすがしい朝日がさす頃には野外での仕事を終り、研究室での実験も順調に終った。

翌日、3号苗の胞子を接種した幼虫の中で一匹どうも様子がおかしい。他の接種個体にくらべて樹皮をあまり喰い進んでいないし、体色が赤味がかつている。この幼虫は胞子接種後2日たつと死んでしまつたらしく何の反応もない。3日目には虫の体から胞子がいつばいに出て来た。私の使用した3号菌は、10日～7日たたなければ中を殺すことはできない筈だ。それが3日で死んだのだ。しかも死んだ虫の体に見出された糸状菌は胞子の色などから考えて接種菌種に使った3号菌とちがうし、2号菌や1号菌ともちがう種別の強力なものだ。念のためこの胞子を人工培養し、再び新鮮なマツノシラホシゾウムシの幼虫に接種すると間違はなく3日目には完全に死ぬる。

こうした強力な糸状菌—4号菌と仮に呼んでい—の発見のお蔭で、しかもそれが突撃研究の初期であつたという時期的な幸運とあいまってその後の実験が非常にスムーズにいったことは言うまでもない。早期の幼虫採集の途中で4号菌がまぎれこんだのだ。偶然アオカビがフレミングの培養基に入りこんだように。偶然………、しかし、それは単なる偶然であつたらうか。

— 1963年4月28日 —





倉敷昆虫同好会会則

(1962年5月10日改正)

1. 本会を倉敷昆虫同好会と称する。
2. 本会の本部を倉敷市住吉町岡山大学 大原農業生物研究所作物害虫才2研究室内に置き、事務連絡先は倉敷市幸町倉敷昆虫館内に置く。
3. 本会は昆虫学に関するあらゆる研究を行い、その進歩普及を図り併せて同好者間の親睦を増すのを目的とする。
4. 前項の目的を達成するため次の諸行事を行う。
 - A 臨時招集会を行う。
 - B 臨時懇談会を行う。
 - C 機関紙“すずむし”を年4回発行する。
 - D その他目的達成のため必要と認められる行事を行う。
 - E 倉敷昆虫館の運営に協力する。
5. 本会の事業年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終る。
6. 年齢・性別を問わず昆虫に関心を有し、本会の趣旨目的に賛意を表する者は誰でも本会に入会出来る。
7. 本会の会員は機関紙の配布を受け、これに執筆し、又懇談会等本会の行う諸行事に参加することができる。但し、会費年300円、中学生までは200円を前納しなければならない。但し分納もこれを認める。会費滞納が2ヶ年以上継続し、通知しても連絡のない時は自然退会とみなされる。
8. 退会せんとする者はその旨を本会事務局に申し出る。但し、既納の会費は返付しない。
9. 本会には幹事を若干名置く。
10. 幹事の任期は2年とする。但し、重任を防げない。
11. 幹事の改選は誌上連絡により投票を以つてこれを行う。
12. 本会の運営に関する事項、会則の変更及びその他細則については、幹事会がこれを行い、誌上に発表し、会員の承認を得る。

会 員 だ よ り

山口県の昆虫について

前略 S先生から山口県の情報を聞かせて下さいとのことでお便りいたします。

まず徳山(海拔10メートル)からクロコ マ・コジヤノメ・ヒカゲチヨウ・キマダラヒカゲ・ヒメウラナミジヤノメ・モンシロチヨウ・モンキチヨウ・キチヨウ・ツマグロキチヨウ・ツマグロヒヨウモン・メスグロヒヨウモン・スジグロシロチヨウ・アカタテハ・ルリタテハ・ナガサキアゲハアゲハ・キアゲハ・ジャコウアゲハ・クロアゲハムラサキシジミ・ムラサキツバメ・ウラナミシジミ・ヤマトシジミ等が見られます。

鹿野(海拔300m)では種数、個体数も多くこの外コミスジ・スミナガシ・コムラサキ・ゴマズラチヨウ・ヒメアカタテハ・ウラギンヒヨウモン

イチモンジチヨウ・アサマイチモンジ・サカハチチヨウ・キタテハ・カラヌアゲハ・クロヒカゲ・アオスジアゲハ・ウラギンシジミ・モンキアゲハ・ジヤノメチヨウ・が産するようです。その他はつきりわからないものとしてテングチヨウ・ヒヨウモンチヨウ類2種・ルーミスシジミがあります。

以上ですが、この中には目撃しただけのものもかなりあります。

今のところ蝶だけ集めているので、ほかのものについてはよくわかりません。

いろいろと書きましたが何かの参考になればと思います。

山口県徳山市備ケ浜小踏 重岡雄太郎様方
福田 賀夫

“すずむし”投稿規定

1. 会員、門前は“すずむし”に寄稿することができる。
2. 原稿は必ず横書原稿用紙を使用し、1行22字になるように書く（1行20字の普通原稿用紙の場合は、欄外に2字書いて22字にすること。）
3. おとしぶみ欄原稿（短報）は欄外に赤色で“おとしぶみ”と明記し、著者名は最後へ（ ）に入れて書く。
4. 学名はできる限り明確に書く。
5. 図版の原稿は必ず、すみ又は黒インキを使用して書く。
6. 図版（写真を含む）は掲載面積にして1/2ページ迄（5×7cm4枚分 相当でこれと考えると考えられる場合には、必ず大きさを指定されたい。指定なき場合は編集幹事に委されたものとみなします。）とし、超過図版については実費を申し受ける。
7. 原稿の登載に際しては、これを一切編集幹事に委せる。

◎ “すずむし”の編集発行期日◎

今後“すずむし”の編集発行期日が次のように決まりましたのでお知らせします。各号登載用原稿は、必ず〆切日迄にお送り下さい。

	発行日	原稿〆切日
No.1	4月30日	4月1日
No.2	8月31日	8月1日
No.3	10月31日	10月1日
No.4	12月31日	12月1日

◎ 新着交換雑誌

広島虫の会会報創刊号	1962. XII	広島虫の会
駿河の昆虫	38 1962. VII	静岡昆虫同好会
駿河の昆虫	39 1962. X	静岡昆虫同好会
駿河の昆虫	41 1962. II	静岡昆虫同好会
因幡のむし創刊号	1961. I	鳥取大学農学部昆虫同好会
KORASANA Vol. 1 No. 3	1961. VII	久留米昆虫同好会
北九州の昆虫	9 (1)	北九州昆虫趣味の会
北九州の昆虫	9 (2)	北九州昆虫趣味の会
北九州の昆虫	9 (3)	北九州昆虫趣味の会
インセクト	13 (2)	昆虫愛好会
WORMSHIP	63 1962 V	北九州昆虫趣味の会
◇	64 1962 VI	◇
◇	65 1962 VII	◇
◇	66 1962 VIII	◇
◇	67 1962 IX	◇
◇	68 1962 X	◇
◇	69 1962 XI	◇

バックナンバー分譲案内（郵送料は別）

	会員	一般
合衆昆虫同好会会報才1号	¥30	¥40
すずむし才1巻才6・11号,各号	¥15	¥20
節形山の昆虫	¥15	¥20
すずむし才2巻才4.5.6.9.10号各号	¥15	¥20
◇ 才3巻才8~12号,各号	¥15	¥20
◇ 才4巻才2~12号,各号	¥15	¥20
◇ 才5巻才1~12号,各号	¥15	¥20
◇ 才6巻才1・4号,各号	¥45	¥50
◇ 才7巻才3・4号,各号	¥50	¥60
◇ 才8巻才1~4号,各号	¥50	¥60
◇ 才9巻才1~4号,各号	¥50	¥60
◇ 才10巻才1~2.3.4合併各号	¥50	¥60
◇ 才11巻才1~4号,各号	¥50	¥60
◇ 才12巻才1~4号,各号	¥75	¥90

1962年度会計報告

借方	金額	貸方	金額
会誌印刷費	17300	前年度繰越金	1193
通信費	4360	会費	17700
事務用品費	1090	寄付金	1570
雑費	1416	広告費	8850
次年度繰越金	6130	会誌売上	875
		雑収益	108
計	30296	計	30296
寄付金内訳（入金順敬称略）			
本田 実	¥ 1,000		
安江安宣	¥ 570		

WORMSHIP	70 1963 I	北九州昆虫趣味の会
◇	71 1963 II	◇
別刷		
台湾産アゲハチヨウ科の1未記録種		
蝶と蛾	12(2) 1961	白水隆
日本で初めて採集されたマルバネリマダラ		
蝶と蛾	12(2) 1961	白水隆
琉球八重山群島産セセリチヨウ科の2種について		
蝶と蛾	12(3) 1962	白水隆
山形県産チヨウセンアカンジミの1新亜種		
蝶と蛾	12(3) 1962	白水隆
SOME NEW FORMOSAN BUTTERFLIES		
Kontyu	27(1)	白水隆
STUDY OF IMMATURE STAGE AND FOODPLANTS		
RESIDENTIAL ADDRESS TO THE ELEMENTARY		
ANNUAL MEETING OF THE LEPIDOPTERISTS' SOCIETY		
Journal of the Lepidopterists' society		
	15 1962	白水隆
ミドリシジミ類における幼虫食性の進化		
蝶と蛾	12(4) 1962	白水隆

目 次

近 藤 光 宏	アサギマダラの新しい食草(ガガイモ)を発見	1
	— 県南部にも生息は可能 —	1
高 橋 友 治	伯耆大山昆虫採集品目録	6
◇◇◇◇◇ お と し ぶ み ◇◇◇◇◇		
重 井 博	ムラサキツバメの雌を倉敷で採集	7
重 井 博	オオヒカゲ天銀山に産す	7
大 森 齊	高滝山にて <i>Leptepenia japonica</i> を採集	8
山 砥 司 朗	高梁川河岸に越冬するゴミムシ科	8
近 藤 光 宏	ホシアシブトハバチを採集	8
~~~~~		
宇 野 弘 之	早起は三文の得という話 — マツノシラホシゾウムシでの実験の思い出 — .....	10
青 野 幸 昭	「大佐町の蝶日記」の採集記録訂正 .....	9
	・ “すずむし” 12巻正誤表 .....	9
	・ 今年度の採集会その他行事計画 .....	5
	・ 会 員 名 簿 .....	11
	・ 倉敷昆虫同好会会則 .....	12
	・ 会員消息・新入会員・再入会員 .....	12
	・ 会員だより 福田賢夫 山口県の昆虫について .....	12
	・ “すずむし” 投稿規定・“すずむし”の編集発行期日 .....	13
	・ バックナンバー分譲案内・1962年度会計報告 .....	13
	・ 新着交換雑誌 .....	13

医 療 法 人

# 重 井 病 院

倉 敷 市 幸 町

TEL 2975・3215